萬葉集感断片

斎藤茂吉

○

萬葉集に関する概観といふやうなものも出来ず、一首一首の訓詁についての新説も今の自分には出来ないから、ただ一言だけ云つておかうとおもふ。

殖竹の本さへ響み出でていまは何方向きてか妹が歎かむ

この一首は萬葉巻十四、東歌のうちであるが、自分はずつと以前からこの一首のあるが、自分はずつと以前からこの一首のかの、『殖竹の本さへとよみ』の句を發見して感歎してゐたのであつたが、しばらく萬葉から遠ざかつてゐるうちに、誰かが何處かで既に論じてゐるかも知れない。

この歌は、無論男のうたつたものとして、

東京文房堂製

理論的に傳はつたものとはおもふが、一しよに寝て、次の朝、別れにくいところを強ひ

この歌は、無論男のうたつたものとして、

煙謡的に傳はつたものとはおもふが、一しよに寢て、次の朝、別れにくいところを強ひて男の立去る気持をば、男みづからが、「道竹の李さへ響み」と云つてゐるあたりは實におもしろく、當時の作者は不用意でいつたものらしいのが、却つて技法の極致を思はせてゐる。古義に契沖の説を引いて、「契沖云。竹の末は風に鳴り、李は別れて歸るとて、諸共に泣くに、ひびくこころあり」と云つてゐるけれども、これは、さういふ「心持」から歌つたのではなく、もつと現實感（實生味）の勝つた歌だとおもふ。強ひて立去る男の行動をば、男みづから誇張してゐるところも、實に自然な心の動きであり、その誇張があるから、下句の「方向きてか妹が歎かむ」といふ句が躍動して来るのである。「道竹」は生へてゐる竹林の事であるが、ここに竹林ふんかを持つて来たのは、實生でふければ可能ふことである。民謡には間々かういふ技法を散見するが、實に注意すべきものとおもふ。

二字下ゲ

○

鳴神のひかり響みて降らずとも吾は留まる

二字下ゲ

○

鳴神のひかり響みて降らずとも吾は留まらむ妹しとどめは

これは巻十一、人麿歌集に出づとある。のである。この一首のかの鳴神の光とよみて「といふ句を以前から注意してゐたのであるが、「ひかり」を動詞を看、「響みて」が無論動詞であるから、動詞で續けたやうに解する人もあるだらうが、自分は、「ひかり」を名詞として解して居つた。即ち、「雷の光が

東京文房堂製

どどろく」といふやうに解して、上代人の視覚と聴覚とを交錯させた、その素朴、自然の力に打たれたのであつた。

この歌は、「鳴神の光とよみてさしぐもり雨も降れゆも君を留めむ」といふ歌と對にかつてゐるのである。是等の二首の「光とよむ」といふ訓方は、「小動」とあるのを手居宣長が、「光動」の誤記だとして考察したのは卓見であつて、後世の自分等までその恩を蒙つてゐるのである。訓詁学者の難有

東京文房堂製

はそこにある。

れとは、「しばし動きて」又は

を学んでゐるのである。訓詁学者の難有

は、そこにある。れとは、「しばし動きて」又は「しばし響みて」と訓んでゐたのであつた。代匠記に、校本、小或作レ少とあるから、宣長は「少」字から「光」字をたれついたつかれ知れない。この種の研究れ没頭すれば會心の境に到りうる面白味れあるに相違ない。

○

吾が面の忘れむ時は国溢り嶺に立つ雲を見つつ偲ばせ

この歌は、「国溢り」歌に立つ雲」といふ實に驚くべき句を持つてゐる。「溢り」は「涙のはふり落つ」などにも用ゐる方で、みなぎりあふれる気持であるが、どうしてかういふことを上代人が云へたかと讃歎するのである。これらは雲の湧く光景を、しじゅう見てゐるうちに、たのづからにして出た言葉であらう。そのやうに、事門歌人として苦吟して得た句でないのであるが、後代の、歌つくることを誓古してゐる自分等にとつては、事門歌人的の立場でかういふ句に對する方がいゝとたれふ。上代人の無雑作に作つた句でれ、後代の自分達にはさう容易には作られない。そ

東京文房堂製

とを誓古してみる自分第にとつては事が詩人的の立場でかういふ句に對する方がいゝと

たゝふ。上代人が無雜作に作つた句でも、後代の自分達には、さう容易には作られぬい。そこで細心に、その無雜作ふ句を味ふ必要があるのである。「八雲立つ」などいふ句でも、彌雲でも八雲でもかまはぬいが、何しろ、後代人にはかう素直とは出て来ぬい。そこで研究する必要があるのである。

口語でどしどし優れた短歌が作れるやうにふれば、これはまた別である。さうすれば、上代の歌の語法などを云々せずに、樂々と自由に歌が作れるやうにあるであらう。口語歌の運動も「ぽつぽつ」初まつてゐるやうであるから、さういふ自信のある人々は、大和ことばなどを棄てて、「でせう」「です」ふんどといふ短歌をつくるがよいと思ふし、歌壇全體から見て、自分はその發達をのぞむものであるが、さて自分自身の身に即して考へると、自分の如きは、まだまだ萬葉集を讀まぬければならぬいのである。

（大正十五年十一月記）

斎藤茂吉萬葉集感銘

特別
文庫14
A53

53-1598